慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「南京事件」の描かれ方に見る文学者の立場
Sub Title	The standpoint of men of letters and the representations of the Nanking Incident
Author	関根, 謙(Sekine, Ken)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2017
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.112, (2017. 6) ,p.96 (151)- 108 (139)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2016年度藝文学会シンポジウム「戦争と文学」 開催日: 2016年12月16日 (金) 場所: 慶應義塾大学三田キャンパス北館ホール
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01120001-0096

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「南京事件」の描かれ方に見る文学者の立場

関根謙

映画『南京！南京！』から

譚さん、長堀さんどうもありがとうございます。お二人には戦争と歴史に対する非常に深い思いがあって、それがご発表のような成果になっているのかなと思いました。また今長堀さんがおっしゃってくださいましたけれども、魯迅と戦争というか、文学が戦争の中でどのような役割を果たしているのか、それを左翼の側もファシズムの側も非常に強く意識してきていると思います。ここらへんの話はあとでお二人と討議させていただきたいと思っています。

まずこれから南京の映画をほんのわずかではありますけれども観てもらいます。観ていただく前に確認しておきたいのですが、「南京事件」というのは1937年に12月13日、69年前の今頃に起こった事件ですね。実は、僕のゼミと授業で学生に訊いてみました。大学院でもです。「12月13日ってなんの日？」と。中文の現代文学の私のゼミで、しかも、中国からおいでの方もかなりいらっしゃるというところで、です。ところがみんな案外わからないんですよ。もっとも日本でも12月13日だからって何かやったかというと別に何もありません。安倍首相は今日も日ロ首脳会談だそうだし、沖縄を見ると今日もオスプレイの事故で、アメリカ側がちゃんと住宅地を避けて飛んで行ったのだから感謝されるべきだというコメントを出したそうです。いったい我々のまわりで戦争っていうのはどうなっているのでしょうか。今日の僕のお話のひとつのテーマは、文学と社会との距離、ちょっと前のことばで申し上げれば文学者の「アンガージュマン」、村上春樹は「コミットメント」と言っているようですけれども、そのような、文

学をする者が社会の現実に対してどのような立場にあるのかについて、最終的なポイントとしてお話ししていきたいと思います。

まずこの『南京！南京！』2009 年陸川監督の作品です。この映画、もしかしたらご覧になっている方もいらっしゃると思いますが、冒頭の部分ですのでちょっと観てください。（映画『南京！南京！』2009 年、陸川監督作品　冒頭部分上映 3'30" ～ 5'40"）

今観て頂いたのが『南京！南京！』の最初の場面なんですが、この映画は、中国でしばらくの間、上映ができませんでした。それはこの『南京！南京！』陸川監督の侵略者日本の描き方が甘いと批判されていたからです。日本人が何人も出てくるんですけれども、現実の厳しさを伝えていないと非難されたことがありました。でもこの映画は世界中で注目された映画で、主演の日本兵が自殺する場面がラストシーンになっていました。大きな意味ではこれから話す阿壠の小説と似た映画作りであり、最初のこの場面が非常に気になるところなのです。先程ちょっと紹介があった『藝文研究』、僕の退職記念号として出していただいたんですが、その表紙にある写真が、実は今のシーンの挹江門（ゆうこうもん）です。

挹江門の悲劇

この同じところ、日本の作家の石川達三も書いているんですね。今の場面をです。お手元のハンドアウトをご覧ください。

ハンドアウト２、石川達三『生きている兵隊』

> 南京防衛軍総司令官唐生智は昨日のうちに部下の兵をまとめて挹江門から下関に逃れた。挹江門を守備していたのは広東兵の約二千名であった。彼等はこの門を守って支那軍を城外に一歩も退却させない筈であった。唐生智とその部下とはトラックに機銃を載せて、城門を突破して下関に逃れたのであった。
>
> 挹江門は最後まで日本軍の攻撃を受けなかった。城内の敗残兵はなだれを打ってこの唯一の門から下関の碼頭に逃れた。前面は水だ。渡るべき船はない。陸に逃れる道はない。彼らはテーブルや丸太や板戸や、あらゆる浮物に

すがって洋々たる長江の流れを横切り対岸浦口に渡ろうとするのであった。その人数凡そ五万、まことに江の水を真っ黒に掩うて渡っていくのであった。そして対岸に着いてみたとき、そこには既に日本軍が先回りして待っていた！

石川達三は 12 月 13 日の南京陥落直後に、雑誌『改造』の特派員として南京に入っています。石川はその翌月 1938 年 1 月に日本に帰り、わずか十日間でこの『生きている兵隊』を書き上げて発表しました。ですから、1938 年の 1 月に執筆に着手し、2 月には完成原稿を『改造』に送り、1938 年 3 月号に掲載されたということになります。しかしこれはその日のうちに発禁処分となり、石川達三は刑事告発されてしまいます。これはその問題の小説『生きている兵隊』の一部分です。ご覧のように、「広東兵の約二千名が守っていた」とあり、誰もここを通さない、つまり徹底抗戦をしろという命令がおりていたといいます。この時の南京守備の司令官は唐生智ですが、「唐生智とその部下とはトラックに機銃を載せて、城門を突破して下関に逃れたのであった」と書いてあるんですね。

ところがその場面は今の『南京！南京！』の中には描かれていません。もし『南京！南京！』の映画でいきなり、この機銃を積んだトラックが司令官とか高級将校を載せて、中国兵が守っているところをバリバリとやりながら突破していったということになったら、こういう映画が成り立つと思いますか？　もう成り立ちませんよね。石川の描いたようなシーンは作れなかったんだと思います。『南京！南京！』で描けなかった挹江門の悲劇はまだあります。石川の『生きている兵隊』の引用をご覧ください。民衆は必死に逃げたわけです。挹江門から逃げていくんだけれども、逃げたその先というのは、実は長江なんですね。長江にみんな殺到していくわけですが、そこで「もう渡るべき船はない」ので、次々に飛び込んでいくんですね。12 月の冷たい水の中に。12 月の長江、非常に寒い中に飛び込んで行って、「あらゆる浮物にすがって洋々たる長江の流れを渡ろう」とした人々、「その数五万」と石川は書いています。彼らが逃げていくその先には「日本軍が待っていた」とあります。ここでどれだけの人が死ぬのかということですが、石川達三はそういう状況を書いているわけです。ところが中国側の映画で陸川監督はそれを描けませんでした。『南京！南京！』の中には描かれてないのです。

上：軍人阿壠、文学者阿壠
左：阿壠筆跡、毛沢東宛書簡（1951 年）

もうひとつみなさんに紹介したいのが 3 なんですが、これは僕が翻訳した阿壠の長編小説『南京』の一節です。この本の出版をめぐっては非常に複雑な経緯があるので省略しますけれども、これは日本語の拙訳です。

ハンドアウト 3、阿壠　長編小説「南京」── 中国語版『南京血祭』・日本語版『南京慟哭』

挹江門の三つの城門はすべて半分しか開かれてなく、後は砂嚢で塞がれていた。守備部隊は人の通行を一切禁じて、群衆に対して散発的な威嚇射撃をしている。群衆は盛んに罵り声を上げて大騒ぎをしている。

しかし群衆はこの城門を結局突破した。転んで倒れたような者を踏みつけて、すごい勢いで流れ出している。

この群衆に対し、守備部隊が機関銃の掃射を開始した。大混乱に陥った群衆の中からもこれに応戦して発砲する者があり、城門の上と下でまるで市街戦を演じているようだ。秩序など完全になくなり、人々が際限なく密集してくる。倒れた人の顔を後から押し寄せる人が次々に踏んでいく。鼻がつぶされ、眼球が飛び出し……人がばたばたと倒れる。押し寄せる人の足元で秋の虫のような呻き声が広がり、倒れ重なった人垣から号泣が響く。それでも人々は城門をめがけて突き進むのだった。……

「上から撤退せよと命令されているんだから通せ！」

「上からは誰一人絶対に通すなと命令されているんだ！」…

倒れていく人、押し寄せる群衆…

間もなく、死体と重傷の人間が、半分だけ開いていた城門を厚く厚く塞いでいった。

この時、小型の戦車が三台群衆を波しぶきのように跳ね飛ばしながら、フルスピードで突進してきた。押しつぶされた人の血が戦車のキャタピラを真っ赤に染め、血肉の塊が泥水のようにあたり一面に飛び散った。激怒した兵士たちの罵声と射撃がこの戦車に集中したが、戦車は人肉でできた道路の上を、車体を揺すりながらまるで何事もなかったかのように走り去っていった。

城門は十メートルほどの高さがあったが、今ではすでに小さな穴でしかなかった。人々は人間の肉体で作られた坂を登り、腰をかがめてこの穴をくぐっていくのだった。

死者の間に埋まってしまった馬が首をもたげて激しくいななないている。馬は自分の悲惨な定めから抜け出ようと、必死にたてがみを振り乱して頭を持ち上げる。見開かれた眼、荒々しい鼻息、茶色の眼には痛々しく膨張した血管が浮き出ている。やがて馬はしだいに衰弱し、噛みしめた大きな歯の間から白い泡を大量に吹き出した。

ここには「挹江門の三つの城門はすべて半分しか開かれていなかった」とあります。僕はこの挹江門に何回か実際にいって確認してきたんですけれども、非常に大きな門です。

この写真をご覧になっていただくと、挹江門がわかると思います。この写真ではバスが通っていますが、この門の高さの半分くらいまで塞がれていて通れなかったわけです。つまり普通のトラック、軽トラックなどでは、ここを突破できるはずはないということです。突破したのはそんな普通の車両ではなかっただろうと思います。阿壟の小説で書かれているのは軽トラックじゃなくって軽戦車でした。キャタピラを備えた戦車が、挹江門を突破していったと阿壟は書いているのです。そして、その大混乱の有様が今みなさんのお手元にある部分です。人々が次々に飛びこんだと思われる長江の岸辺がこの写真です。写っているのは僕なんですけれども、僕の後ろに広がっているのが、たぶんここだったというところ

上：現在の挹江門
下：悲劇の長江川岸付近

なんですね。実は、挹江門から通り沿いに調査していきますと最短で行けるところがここでした。ここから向こう岸まで、長江の川幅は 1.5 キロあります。この 1.5 キロの川幅が「人でいっぱい」だったということです。挹江門からこの川べりまでは 750 メートルありました。そうすると、合計およそ 2 キロ以上にわたって人が密集しているということになります。そして阿壠によると、挹江門に行く手前、南京市内からここに逃げていくわけですが、このまわりは日本軍があらゆる城門をすべておさえていて、ここだけ空いていたから、そこに殺到したということです。彼はその悲惨な状況を書いているわけです。今日は南京出身の留学生の人たちもいてよく知っていると思いますが、南京の中心部、鼓楼や新街口のあたりから挹江門まではおよそ 7.8 キロあるんですね。この 8 キロ近い通りが

人でいっぱいだったのです。つまり挹江門を越えて長江まで逃げ延びようとする人々が 10 キロにも及ぶ空間にあふれていたことになります。こういうことをはっきり書いているのは、実は、国民党の将校であった阿壟の文章だけでした。

この写真のところは大変悲惨な出来事の起こった場所ですから、中国側は記念のためのモニュメントなり何なりを建てているだろうと思って、僕は有名な南京城壁沿いに探してみましたが、何もありませんでした。この写真はここから遠くない場所にあった赤旗を模したモニュメントです。すぐ近くです。これこそそうだろうって思って確かめてみたのですが、全然違っていました。これは紛れもなく赤旗なんですけれども、南京のもうひとつ別な出来事のモニュメントでした。先程長堀さんのお話にもあった国民党と共産党の内戦の時、共産党は 1949 年にほとんど勝利をおさめますが、1949 年の 4 月下旬から 5 月にかけて、中国人民解放軍は 100 万の大軍で長江を渡ります。そして南下して国民党に追い打ちをかけるわけです。これはその渡河大作戦、長江を解放軍が勝利のうちに渡ったことを記念するモニュメントだったんです。つまり、こちらの挹江門の悲劇とはつながっていないのですね。

阿壟の『南京』と戦略としての宣伝

このような歴史の事実があって、そのことを書きまくったのがこの阿壟の『南京』でした。ところが、この本は全然出版されませんでした。先程挹江門の悲劇は映画になりえないと申し上げましたけれど、戦争のことを細かく見ていくと、たとえば日本民族、日本の侵略者対中国の愛国者のような単純な図式では到底はかれないことが山ほど起こっているわけですね。そのことに、文学者が立ち向かったときに、先程長堀さんのお話の中で触れた宣伝の観点が問題になっていくようです。この悲劇の起こった 1937 年 12 月の前、蒋介石に力づくで共同抗日を迫った西安事変が 1936 年 12 月に西安で起こっているわけで、1936 年以後は「統一戦線」の方針が非常に重視されていきます。先程のお話のように、これはコミンテルンの基本的な政策でした。コミンテルンがトロツキーを葬り去り、スターリン主導の世界的な運動が展開していったのです。こういう時代の流れの中で、当然共産党が当時目指したことは、国民党と共産党の連合こそが、中国の未来を拓くのだという路線だったんです。

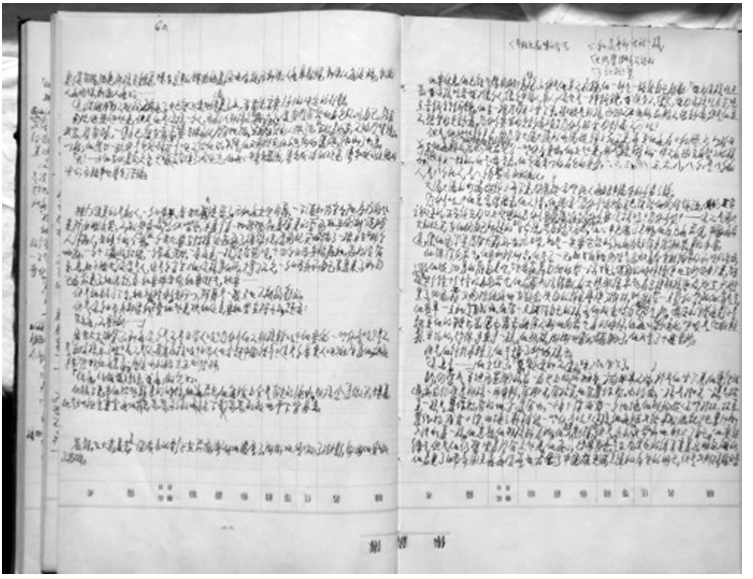
小説『南京』
日本語版と
中国語版

阿壟のこのような小説は、たぶん全く役に立たない、というか、宣伝の立場から見れば、有害でこそあれ、微塵の益にもならないというふうに判断されたんだと思います。阿壟のこの『南京』は当時の文壇で高く評価されていましたが、出版されることなく、長い年月そのまま埋もれてしまいました。その理由については、私の『抵抗の文学』の中に細かく書いてありますので、お帰りの際にでもお求めいただければと思います。

ともかく阿壟の『南京』の刊行は認められませんでした。それが最終的に中国で復元出版が承認されるのは 50 年後なんですよ。この間に周而復の『南京の陥落』なども刊行されていますが、阿壟の生々しい原稿の復活は 50 年経ってからでした。しかも、ほとんど何の解説もつかずに出版されています。こそっと出された、そんなような感じがします。

さてこの写真、阿壟原作の『南京』はこんな本でした。ちょっと見ると、いかにも中国風のステレオタイプ的なもので、まず中身は期待できないと思うのが普通ですね。僕もそう思って手に取りました。しか読み進めていくうちに先程のような場面に心を動かされ、翻訳に取り組んだ次第です。『南京』の原作はこの写真のようなものに書かれていました。正確に言うと、『南京』の最初の原稿は紛失しているんです。阿壟は 1940 年代に入って、もう一回書き直しました。まだ国共内戦の時代で、彼は身分を隠してあちこち移動しているんですけれども、その時の勤め先のノートの裏に書かれた原稿です。びっしり書かれています。これ

阿壠「南京」原作ノートより。
上：冒頭部分、公募の切り抜きもある。
下：『南京慟哭』で復原翻訳した泣く日本人の箇所。



は実は大型のノート、B4 くらいのサイズの非常に大きなノートで、こんな小さな文字で綴られていました。これが中国版『南京血祭』・邦訳『南京慟哭』の原稿だったのです。

阿壠とその描写力

阿壠は国民党の黄埔軍官学校と重慶の陸軍大学で学んだ高級将校で、重慶では参謀本部に入っており、最後は陸軍大学で大佐として教官になっています。最後にいたのは南京で、大佐に昇進したのは 1949 年です。解放軍が南京を掌握する 49 年に大佐になっているわけです。これはどういうことなのか、この辺まだわからないことがいっぱいあります。阿壠の人生については、本当は共産党がすべての資料を持っているはずですが、これを遺族にも開けていませんので、僕らは、本当にいろんなところからの断片を繋いでいって推測するしかありません。

申し遅れましたが、これが阿壠です。日本軍との戦いで、1937 年 8 月のいわゆる第二次上海事変ですね、その最前線に少尉小隊長として出撃したのが最初です。しかし小隊を指揮しての戦闘中に、顔面右側の、ちょうどこの陰になったあたりの顎を砲弾の破片が貫通し、奥歯と顎がぐちゃぐちゃになるような重傷を負って阿壠は前線から撤退します。そうして 12 月の南京戦のときに彼は療養生活に入っているんですが、戦友たちの様々な話をもとにして『南京』が書かれたということになります。南京での戦闘状況についていろんなことがあるんですけれども、これも省略します。

ここで『南京』の戦争の描写の仕方に焦点を絞って考えてみたいと思います。みなさまのお手元の 4 をちょっとご覧ください。

ハンドアウト 4 、

> いま、この大通りがまさに地獄と化している。死人、血、砕けた坂、瓦礫、曲がった鉄柱、変形した鉄の扉、後足のない三毛猫、電線、これらの恐怖と痛苦に満ちたものがこの大通りのすべてだった。建物の並びが一列完全にふっ飛んでいた。乗用車が一台灰と鉄骨を残して真っ黒に焼かれている。そして路面は裂け、（中略）そこの壁一面に点々と付着していたのはすべて爆撃で吹き飛んだ人の肉片だった。それは芸術家の描く「桃林に春馬を試す」という図案そのものだ。赤や紫の色をした腸が、葉をすっかり落とした木の枝にひっ掛かっている（中略）家の軒の上まで飛ばされた子供の首が一つ、やり場のない怒りを込め太陽を睨みつけている。　（阿壠『南京慟哭』）

ギラギラと炎天の下に横たわっている虚無のひろがりの中に路があり、川があり、橋があった。そして、赤むけの膨れあがった屍体が所々に配置されていた。これは精密巧緻な方法で実現された新地獄に違いなく、ここですべて人間的なものは抹殺され、たとえば屍体の表情にしたところで、何か模型的な、機械的なものに置き換えられているのであった。苦悶の一瞬足掻いて硬直したらしい肢体は一種の妖しいリズムを含んでいる。電線の乱れ落ちた線や、おびただしい破片で、虚無の中に衝撃的の図案が感じられる。だが、さっと転覆して焼けてしまったらしい電車や、巨大な胴を投出して転倒している馬を見ると、どうも超現実派の画の世界ではないかと思えるのである。（中略）路はまだ処々で煙り、死臭に満ちている。　　（原民喜『夏の花』）

これは爆撃の場面です。実は日本軍は 12 月の南京陥落、南京城侵入のその前、11 月に南京に対して戦略爆撃を行っています。この 11 月の戦略爆撃は大変な規模で行われたもので、その一節がここに載っています。「いま、この大通りがまさに地獄と化している」というのは、阿壟が描いた南京爆撃の惨状なんですが、すごい迫力で書かれていることがおわかりだと思います。

そして阿壟の引用の真下に続けられているのが、実は原民喜の『夏の花』なんです。我々慶應の『三田文学』の大先輩でもあります。原民喜は原爆投下の直後に広島市内を彷徨うんですが、そのときの凄惨な描写がここに引用した箇所です。

このふたつの文章を比べてみると、びっくりするくらい似ていると思いませんか。この非人間的な、人間の感覚を破壊しつくすような、残酷な爆撃。その惨状を目の前にしたときに、ふたりの文学者が期せずして非常に波長のあうすばらしい描写を残しているということに、僕は注目しておきたいと思います。こういう感性は共通しているのではないでしょうか。

翻訳作品の意義

ちょっと時間が押しているので、まとまりがないことになってしまいましたが、こういう戦争の状況、きわめて抑圧されて、人間の尊厳の危機的な状況に陥れられたときに、文学者たちはどういう表現をしているかを確かめてみたいと思

います。ハンドアウト５にあげたのは、実は峠三吉と金芝河の詩です。

ハンドアウト５、

語れ　語れ　引き裂かれた　体で　傷口　ことごとく　開かれた　唇として　舌として　金芝河「民衆の声」

三十万の全市をしめた　あの静寂が忘れえようか　そのしずけさの中で帰らなかった妻や子のしろい眼窩が　俺たちの心魂をたち割って　込めたねがいを忘れえようか！　峠三吉『原爆詩集』

金芝河は若いみなさんはほとんど知らない人の方が多いかもしれません。ちょうど朴槿恵大統領が今危ないことになっていますが、そのお父さん朴正熙が韓国全土に戒厳令を敷き、独裁に突き進んでいったときに、そのようなファシズム的傾向に抵抗した民衆詩人として金芝河がいました。金芝河は逮捕されて、死刑宣告を受けるんですけれども、その彼の残した『民衆の声』という詩は、実は日本でも多くの読者を持っていて、我々の世代では金芝河の名前を知らない人はたぶんいないだろうと思います。そのくらい影響力のあった詩人です。その金芝河の詩、最初の１行です。「語れ語れ、引き裂かれた体で。傷口ことごとく開かれた唇として舌として」このすごい言葉を読んだときに、僕は脳裏に峠三吉の『原爆詩集』が自然と浮かんできました。『原爆詩集』は高等学校の教科書に載っているのもあると聞いています。ここに書かれているのは「眼窩」、眼ですよね、この一語に原爆の悲惨さが込められていると思います。こういう凄惨な状況を前にしたとき、詩人の反応がこのように自然な繋がりを持つようになるということは、やっぱり重要だと思います。

結局僕がいちばん言いたいことは、ここには独文の先生方もいらっしゃって、ベンヤミンの専門家もいらっしゃるのに、こんなことを言うのも畏れ多いのですが、僕はベンヤミンの翻訳論を座右の銘にしているんです。

ハンドアウト６、ウォルター・ベンヤミン『翻訳者の課題』

翻訳は一つの形式である。翻訳の法則は原作の内部に、原作の翻訳可能性として包含されている。

翻訳において原作は、いわば言語のより高次でより純粋な気圏の中に伸びていく。（そこでは）諸言語が親和して充足しあう。この気圏に原作は丸ごと到達しはしないが、翻訳においてたんなる伝達を超えるものは、この気圏の中に位置する。

翻訳者の課題は、翻訳言語の中に原作のこだまを呼び覚まそうとする志向を、その言語への志向と重ねることにある。この点に、創作とはまるで違う翻訳の特徴がある。

翻訳とは何かについて、ベンヤミンは原作の中にある真実、それを我々翻訳者がまず共有できるかどうか、我々がその原作の作品世界の中に自分の真実を見出すことができるか、これができなかったら翻訳は不可能だと言っています。しかし作業としての翻訳は、もちろん何だってできます。あらゆるものを翻訳することは可能なんだけれど、ベンヤミンは文学を翻訳する意味とは何かということを語っているのです。ベンヤミンはこの後ナチスに追われて殺されていくわけですから、命がけで語る翻訳の理念ですよね。そう考えていくと、翻訳者のなすべき仕事は実に大きいと思います。翻訳作品というのは、原作との間にはっきり共鳴する響きがなければなりません。それがなければそもそも翻訳すべきではないのです。

今日は「戦争と文学」というテーマでお話ししました。僕がこの阿壟に惹かれた理由というのは、阿壟によって描かれた世界が、やはり、僕が心からそれを真実だというふうに確信できる世界であって、阿壟の訴えかける強い人間へのシンパシー、人間への愛情の感性を僕はやっぱり共有できるからなんですね。こういう共感がない限り、戦争文学を扱っていうはいけないんだろうと思います。本当はこのあと阿壟と石川達三、火野葦平との比較をしたかったんですが、時間の関係もありますのでいったん切らせていただきます。